

コロナ禍における中原中也記念館ワークショップの試み

中原中也記念館との連携および遠隔授業ポータルの有効性

山根 由美恵

Nakahara Chuya Memorial Museum Workshop and Covid-19 Disasters

Cooperation with the Nakahara Chuya Memorial Museum and the Usefulness of its Distance Learning Portal

YAMANBE Yumie

(Received September 25, 2020)

はじめに

二〇二〇年、世界は未曾有の危機に直面している。中国・武漢から始まったCovid-19（以下、コロナと表記）感染は全世界に急速に拡大し、甚大な被害をもたらし続け、未だ収束の気配は見えない。ワクチン、治療薬がない状態で、無症状・発症前患者から感染する点、感染力が強い点、遺伝子変異を繰り返す点から、有効な手立ては得られないままである。全世界がこのウイルスに対して全力で戦っており、新しい生活様式の元、様々な試行錯誤が行われている。

山口大学は四月一四日から遠隔授業のみを行い、緊急事態宣言が解除され（五月二五日）、第一波が収束に向かいつつあった六月一九日から、同大学の定めるガイドラインに基づき許可された授業の対面授業が可能となった。今年の一年生は対面に関わる行事が殆ど中止になっており、現在も様々な制約が設けられ、高校生の時に思い描いた大学生活とはかけ離れた状況にある。このような制約の中、記念館に訪れる形のワークショップが可能であるか模索し、中原中也記念館（以下中也記念館と表記）の全面的なバックアップの元で滞りなく行うことができた。また、この模索の結果、全てが対面授業に戻った後も有効な方法があることに気づいた。このコロナ禍は授業そのものを問い直す機

会となったとも言える。以下、七月一七日に行ったワークショップの実践報告を行い、アフターコロナのワークショップについて一つの可能性を述べてみたい。

一 ワークショップ実現への準備過程

「中原中也記念館ワークショップ」は、「基礎セミナー」におけるオムニバス担当分（七月一七日・九〇分一回）で行ったものである。発想を得たのは、稿者が四月に山口大学に着任した際における国語科・中野伸彦教授の助言（前任者が同授業で中也記念館に学生を連れて行っていた）による。中也記念館では「教科書で読んだ中也の詩―思い出の一篇」（以下「教科書」と表記）というテーマ展示が行われている（二〇二〇年二月一四日～二〇二一年二月一四日）。国語科教員を目指す学生にびつたり展示であり、是非学生に閲覧してもらいたいと考えた。四月はじめの段階では通常授業を行う予定だったが、四月一四日から遠隔授業に変更されたことで、記念館ワークショップの実現は不可能になった。しかし、六月一九日からガイドラインを満たした対面授業が再開されたことを受け、十二名という受講生の人数から、感染対策を十分に行っ

た場合、ワークショップは可能ではないかと再考し、実現への模索を始めた。

第一に行ったのは、受講者の参加の意思の確認である。六月九日、受講者（国語科一年）のメーリングリストを使い、感染対策を十分に行った上で中也記念館に行くことに対する参加の意思を尋ねた。ここでは感染に対する不安がある人がいるなら行わず、不安を感じるなら正直に書いて欲しいと注記している。三日後の六月一二日、全員から参加の意志をメールで確認した。これまでこのような行事がなかったことから、参加に積極的な言葉が多かった。

第二に、中也記念館に十二名の学生の入場が可能かどうかの確認を行った。中也記念館・中原豊館長は研究会等で面識があったため、六月十二日に館長に実現可能かどうかのメールを送った。その際、十二名の入場の可否、当日の学芸員の解説の可否、および解説についての一つの提案を行っている。提案とは、事前に稿者が学芸員の解説を動画で取り、遠隔授業ポータルで予習として流すという方法である。

山口大学では、「遠隔授業ポータル」というシステムを導入しており、授業履修者だけがサイトにアクセスすることができる。このシステムでは動画配信が可能であり、稿者はZoom授業や対面再開後の授業（ビデオで授業を録画した）で、連絡があった人へのみCRJを教え、授業動画を見てもらうようにしてきた。Zoom授業の場合は、ネット環境のトラブルによりうまく受講できない場合が毎回必ず複数出ていたこと、対面授業の場合は、対面授業が不安な学生に遠隔授業を受けてもらうという目的だけでなく、教育実習に行くが授業を受けたいと望む学生やコロナでなくとも体調不良の際に学校に行くことを自粛する学生がいたためである。全員にCRJを教えなかつたのは、リアルタイムの授業に集中してほしかったからである。このスタイルは受講者に好評であり、今度も続けたいと思っている。このように動画配信のシステムが整備されていることがあり、本ワークショップでも有効と考え、解説動画の撮影についての提案を行った。

十二名の学生入場、および解説動画撮影に関し、中也記念館で会議が行われ、次のような条件での実施許可が出た。

1、中也記念館は、館内滞在三十名以下、同時入館五名程度までという制限を設けている。十二名の場合、時間差入館および入れ替え制で、一階展示室（「教科書」）を教員とともに見学、二階展示室（企画展1「汽車が速いのはよろしい」—中也の詩と乗り物」（二〇二〇年四月一五日）—一月一五日、以下「乗り物」と表記）を自由見学の二グループに分かれた形での閲覧とする

こと。

2、学芸員の解説は密集の状況を生み出すので当面の間実施していない。録画した形は初めてだが、会議の結果、可となった。担当は池田誠学芸員である。

1の条件はクリアできそうであり、2の解説録画の許可から、動画を予習の形で組み込むことで「ワークショップ」として成立することが可能と判断し、実行するための行動を開始した。

二 ワークショップ型授業の定義

上条晴夫氏によれば、「ワークショップ型授業」の定義は「自由感のある「活動」を通して学ぶことで、関心・意欲・態度を基礎とした主体的な学びの力を育てる」ことであり、基本構造は、説明（導入）、活動（展開）、ふり返り（終末）となっている。さらに、次の記述はコロナ禍における制約がむしろ「ワークショップ型授業」として成立する状況となるのではないかと推測した。

最初に「活動のルール」を明確に説明したら、あとは、できるだけ介入しないように努力する。学習者の「自由感」を確保するためである。

学習者は「活動のルール」を明示されることによって、そのルールの範囲内で、自分なりの「試行錯誤」をくり返すことができる。「ああでもない、こうでもない」と考えをめぐらす。教師が思いつかないような方法も試みる。

ワークショップ型授業では、そうした活動の試行錯誤を「思考の跡」として「ふり返り」の活動をする。体験的な学びを言葉にすることによって、「学習化」をはかる。

以下、**説明**を配信動画と記念館入館までの説明、**活動**を当日の記念館での活動、**ふり返り**をレポート作成で組み立てることにした。

三 説明・遠隔授業ポータルを使った予習

配信動画作成のため、六月二六日に中也記念館に伺い、録画を行った。担当の池田さんには、テーマ展示の見どころと、今回の展示で苦労した点について解説して頂いた。中也記念館はコロナ禍で休館となっている時期（四月一三日～五月二五日）があったが、館内展示の一部の解説をYouTube配信しており、「教科書」に関する動画（五分）がすでに公開されていた。今回のワークショップでは、この動画も一緒に視聴するように指示し、この動画と重ならな

い点について新しく解説して頂いた。解説は大きく二点が語られている。

一点目はテーマ展示の見どころについてである。「教科書」は三部構成となっている。第一部では多くの教科書に掲載され、中也の代表作とも言える詩の展示（「一つのメルヘン」、「サーカス」等）、第二部では教科書掲載は少ないが、紹介したい詩（「言葉なき歌」「子守唄よ」等）、第三部は教科書に掲載されていないが、記念館として知ってもらいたい詩（「酒場にて」「詩人は辛い」等）である。第一部はメジャーな詩、第二部はレアな詩、第三部は教科書掲載という枠を外した際の魅力的な詩という流れであり、非常に魅力的で練られた構成になっている。

二点目は今回の展示で苦労した点についてである。これは学生に展示など企画を行う際、どれだけ見えない努力や試行錯誤をしているのか、企画実行に伴う苦労を知ってもらいたかったからである。「教科書」では詩の選定の苦労はなかったが、ポスター作成に関し、思うような展開ができなかったそうである。現在作られたポスターは非常にシンプルなデザインであるが、当初は外側に教科書の表紙を使用する予定だったという。教科書は賞利があつてはいけないので、掲載には様々な制約があり、今回のポスター掲示では使用できないということであった。一つ一つの教科書会社と個別に連絡を取ったため、諸連絡に少なくない時間がかかった上、掲載不可となった。今回の経験を今後のポスター作成へ活かしたいと語られている。普段何気なく見ているポスターであるが、作る際には会社との交渉など様々な手順があり、簡単にできるものではないことが学生に伝わったと考えている。六月二十七日、動画を遠隔授業ポータルにアップした後、記念館公開のYouTubeのURLとともにメーリングリストで告知し、本番までに見ておくように指示した（予習）。

なお、この動画は池田さんの了承を得て、稿者の担当している「国文学購読Ⅱ」（二十一名履修）、「国文学概論」（三十三名履修）におけるZoom授業で流し、中也記念館のイベントとして告知している。

四 活動：中原中也記念館におけるワーク（七月一七日）

当日のワークであるが、三密回避のため、館内で教員が十二名全員を集めて説明を行うことができない。また、担当が七月一七日一回のみで、その他の時間をすることもできない。しかしこの制約は、上条氏の述べる「最初に「活動のルール」を明確に説明したら、あとは、できるだけ介入しないように努力する。学習者の「自由感」を確保するためである」という活動として成立するの

ではないかと考えた。つまり、事前や当日の館内解説ができないということは、先入観が殆どないという状態である。その先入観がない状態で、自分で印象に残った詩を自由に選ばせる（レポート課題）という形にすることで、教員の解説を聞いて考えるという受け身ではなく、能動的・自主的な学びとなるのではないかと、ということである。

担当の「基礎セミナー」の時間は一コマ（八時四〇～一〇時一〇分）である。中也記念館の開館が九時からであったため、八時五〇分集合にし、点呼の後、屋外で中也の生涯を簡単に述べ、ワークの説明を行うことにした。館内ではワーク開始の指示と解散前のレポート指示だけにし、全体への働きかけは行わなかった。ただ、館内で漫然と閲覧するのを避けるために、レポート作成のメモを取らせることをワークとした（事前に書きメモを取る了承を得ている。スマホ撮影は不可）。ここではメモを取りやすい資料を作成することを重視した。今回池田さんの協力で「教科書」における全ての展示の詩を知ることができ、その詩を全てプリントに載せることにした。メモの際、詩の本文を書く必要がなく、詩の印象をすぐに書けるからである。

ワークショップ当日は暑くなったが、天候に恵まれ、十二名全員が遅刻なく集合し、外の広場で点呼後、プリントを配布した。全ての学生が中也記念館に訪れたことがなかったため、中也の生涯について簡単に解説した（A4一枚程度）。天折の詩人であり、多くの人から才能を惜しまれたことは高校までに学習済と思われるため、その辺りは簡略化し、中也の酒癖の悪さについてのエピソードを紹介した。中也はそのルックスや天折の事実、教科書掲載の詩から、繊細な印象を持たれることが多いが、お酒が入ると多くの人から聞いていた。このエピソードを紹介したのは、「教科書」で展示されている「酒場にて」「詩人は辛い」などの反骨精神のある詩を生み出す理解に繋がると考えたからである。なお、酒席で絡まれ関わり合うことを避けた太宰治が死後才能を惜しみ、殴られた大岡昇平が「中原を理解することは私を理解することだ」と語ったことを述べ、中也の人間らしさとともにその豊かな才能が皆に認められていたこと、早世を惜しまれたことを強調している。

また、館内では稿者は解説せず、印象に残った詩についてメモを取る指示をこの場で行った。マスクを確認し、手指消毒をして入館したが、入館料を各人で支払うようにしたため、受付で密状態になってしまった。これは稿者の認識不足であり（外で集めて一度に渡すようにすべきだった）、大きな反省点である。

今回、こちらから要請していないにもかかわらず、中原館長が直接迎えてくださった。その後、館長からご挨拶を賜ったことは、一年生にとって格別な思いがあったようである。

挨拶の後、二グループ（各六名）に分かれ、ワークを開始した。二十五分入れ替え制にし、稿者は一階の「教科書」で学生の様子を観察し、個別の質問などに答える形にした。二階を全く見なかったが、二階にも企画展示（「乗り物」）があり、学生の自主的な学びを尊重した。一階では展示について、熱心にメモをする様子が見られ、小声で感想を言い合っている姿が印象に残った。

入れ替え制で二階のグループが降りてきた際、二階の印象を聞いたが、展示だけでなく、映像やクイズなどがあり、手持ち無沙汰になることはなかったとのことである。こちらは指示していないが、二階の展示（「乗り物」）についても自主的にメモを取っていたようで、それがレポートに反映されることになった。

館内には他の入館者がいたこともあり、館内ワークは十時終了とした（正味一時間の滞在）。もっと見たい人は残って良いと述べ、ワークシヨップ自体は解散した。

五 ふり返り・レポート

期末の時期であるため、レポートは二週間の猶予を設けた（七月三一日）。字数は四〇〇字であり、課題は「印象に残った詩について」である。四〇〇字前後が半数（五名）であったが、四〇〇字以上書いている人がその数を超えており（六名）、二二九四字という力作もあった。稿者の力不足で一人未提出者がいたが、多くの学生の意欲が感じられ、感慨深いものがあった。以下、このレポートの傾向を述べてみたい。紙幅の関係上、抜粋の形になっている。学生はA〜Kという表記とし、傍線は私に付した。

1 記念館を訪れることで学んだもの（場・原稿・書簡など）

① 記念館を訪れるまで、私は中原中也について詳しく知っているわけではありませんが、しかし記念館に入り、今自分が立っている場所でも中也が生まれ育ったのだと考えると、時を越えて私たちがつながつているような不思議な感覚になりました。2階には乗り物と中也の作品に関する展示があり、現代とは違う当時の交通事情や、技術発展への中也の思いなどを知る

ことができました。また、推敲を繰り返した跡が見られる原稿が印象に残りました。一人称が「僕」から「俺」に変わっていたり、一文が丸ごとなくなっていたり、そういった変更点から中也が表現したかったものが見えてくるようだと思います。（I）

①の感想は、記念館ワークシヨップの意義そのものといえる。中也記念館は中也の生家跡地に建てられていることもあり、「場」の持つ力によってIさんは時間を超え、中也本人と繋がったような感覚を味わったという。記念館を訪れる形のワークシヨップは、このような感性を育てる契機となると言える。また、Iさんは原稿の推敲にも感じるものがあったようで、このような生原稿の持つ力は他の学生のレポートでも見ることができた。

② 二階の展示は、乗り物と中也の人生・詩との関わりでの展示で、乗り物に注目しているのが新鮮でも面白かったです。中でも『嘗てはランプをとほしてあたまのなんです』の詩が科学批判の立場が垣間見えて印象的でした。原稿では、前半は書き直しなど推敲の跡が見られるのに、「記者が速いのはよろしい……」の部分から後半はほとんど手が加えられていないことなど、科学、特に車に対する思いのなかなと想像することが出来ました。後半の電気自動車のガタガタいう音についての文も、音に敏感な感性も垣間見ることができる詩だと思いました。（A）

③ かつてはランプ（稿者注 二階展示の詩）詩を書いた原稿用紙が飾られていたが、僕という単語を俺に改めていたり、後半のエエィッ！の追加など怒り心頭な様子で書いたのだろうかと感じた。他にも「ランプのないところはなくらい」を「ほとんどない」と逆に強調を弱めている部分はあたかも自分の家はそんなことはないんだぞと、現代文明に自分とはどっぷりとつかっているわけじゃないんだぞと取り繕っているようにもみえて面白いと感じた。他にもくどくどと書いた部分を簡潔な表現に手直ししている部分も多く見受けられ、詩を書いているこの時はいら立ちを抑えきれなかったであろうはずなのにそういった細やかなことはしつかり行われていることを不思議にも感じる。（D）

②③の感想は、二階展示（「乗り物」）の詩についてであるが、「乗り物」

については配布プリントに載せていない。つまり、ここで引用している「記者が速いのはよろしい：」、「エエイッ!」、「ランプのないところはなくらい」、「ほとんどない」は全て自主的にメモを取った上で書いている。指示していないにもかかわらず、自分が印象に残った表現を丁寧にメモした非常に意欲が高いレポートになっている。生原稿は作家の手直しの様を視覚的に見ることが出来る。換言すると作家の思考の道筋を辿ることが出来る貴重な資料であり、出版された本など完成した作品を見るだけではない、作家の思考の後を辿るという貴重な経験となる。②では前半で行われていた改稿が後半ではないことと気づき、③では簡潔な表現への変更などに注目しており、生原稿を見ることによる豊かな学びが得られたと考える。

④曇天

「はた」をはたとして、またはオノマトペとしていろいろな形で詩に散りばめ、落とし込んでいると感じた。

はたは日常生活の世界とは異なった、けれども現実にある幽霊のようなふわふわとしたものとして表現されているように感じる。当然干渉することはかならず少しの恐ろしさのようなものをたたえて世俗のことなどどこ吹く風といわんばかりに存在している旗を表現している様子がとても良いと感じた。

(D)

⑤この詩は、昭和8年4月25日付の安原喜弘宛書簡に同封されたものである。館内の説明によれば、当時列車に乗ると云う事は相当な長旅。そんな旅に出る、人々の喜びと喧騒を描いているのがこの詩であるようだ。

しかし、この詩からは喜びなどではなく、悲壮感が漂っていると言った方が正しい気がする。

抑々この詩は4部構成の内の第2部である。そして、一つ手前の詩の冒頭には「此(こ)の年、三原山に、自殺する者多かりき。」とある。①の詩の最後に登場する「淋しい夜の山の麓」とはおそらく三原山の事だろう。自殺の多い三原山の麓をかすめるように走る鉄道。中也の目には、人々が乗る列車がそんな風に映ったのかもしれない。

だからこそやって来た曙が胸に沁みただろう。そして、この一節で中也の視点は三原山から、曙へと移っている。やって来た曙は自殺などと言うマイナスの側面の多い存在とは真逆の存在。それに目を奪われ、列車は自殺の山

へ向かうものから曙の明かりの射す者へと変化した。それを、最後の2節で表しているのではないだろうか。(K)

④⑤も二階展示の詩であり、これらは全て自主的なメモに基づく意欲的な考察である。④では「はた」の象徴を自分なりに解釈している(「はたは日常生活の世界とは異なった、けれども現実にある幽霊のようなふわふわとしたものとして表現されている」)。⑤は書簡の日付を筆頭に表現、解説も全てをメモしている意欲の高さが際立っている。展示解説において「人々の喜びと喧騒を描いている」とあったが、「悲壮感が漂っている」と自分の感性を書き、その理由について自らの論を展開している。これは与えられた情報を鵜呑みにするのではない「批判的読書」ができており、こうした姿勢を今後も伸ばしたいと思わされる良いレポートである。

2 「教科書」における個々の詩の分析

・第一部で展示された詩について(「サーカス」「一つのメルヘン」「月夜の濱邊」「汚れちまった悲しみに」「骨」)

⑥「サーカス」は中学校で習ったことがある詩でした。習ったとき、中学生だった私は「ゆあーん ゆあーん ゆあーん ゆあーん」という言葉に衝撃を受けました。擬態語が入っている詩にまだあまり触れたことがなかったことに加え、聞き覚えのない不思議な言葉が強烈なインパクトを私に残しました。何年も経って、多くの詩に触れて、「サーカス」の内容を忘れてしまってもずっと「ゆあーん ゆあーん ゆあーん」という言葉だけは覚えていました。たくさん詩を学んだけど、こんな風にずっと覚えている言葉は他にないし、こんな独特な表現はほかの人にはできないので、中也の感性の鋭さを感じました。中学生の時は、ただ「不思議な表現が入った詩だなあ」ぐらいにしか考えていかなかったけど、今回再びよく見てみると、最初の二段落の「茶色い戦争」や「疾風」といったどこか暗く、冷たい表現と三段落目からの「サーカス」の明るい描写の対比が双方を引き立てあっているなと感じました。教科書で習った時から時を経て、その当時は感じることでできなかったことを今回感じる事ができて、とても楽しかったです。(B)

⑦一つ目は、サーカスです。この詩を読んだとき、まず最初の三連の中にあ

る二つのメタファーにひかれました。そして、次の四連で、その独特な表現と世界に完全に引き込まれました。作者は、どこで、どのような立場で、なにを表現しているのかを想像すればするほどこの詩の深みにはまりました。

最後の一連では、今までとは少し変わった感じで私には作者の郷愁のような気持ちが前面に押し出されているような気がしました。全体的に中也の独特な世界観が全開でとても興味をそそる内容でした。(C)

Bさんは「サーカス」を中学校で習った際、「ゆあーん ゆあーん ゆあーん ゆあーん」という表現に衝撃を受け、その後も記憶に残ったそうである。このような詩的表現は、読者に言語表現の自由度、奥深さ・豊かさを感じさせ、詩を学習する重要な意義となり得るだろう。またBさんは中学校の時と現在において感じ方が変わったことを書いている。これはBさんの成長の証と言え、中学生では気づかなかった戦争などの暗い背景に気づき、再読の面白さと重要性を認識している。また、⑦は、連の繋がりとともに「どこで、どのような立場で、なにを表現しているのかを想像」しており、本ワークショップが表現への興味と想像力に作用したことがわかる。

⑧「サラサラ」をいろいろな用法で使っていてよいと感じた。川のさらさらはいうまでもないが陽のサラサラは真新しく感じたものの、違和感を全く感じさせない岡の自然描写と違和感なく調和をとれた詩全体としての完成度の高さに感動した。(D)

⑨この歌には「さらさら」という単語が複数出てきますが、どれも全く同じようには感じられず、同じ表現ではあるものの違った雰囲気があると思います。また、水や粉末にさらさらという表現を用いることはよくありますが、陽にその表現を使うところが面白いです。この詩だけではなく、中原中也の詩には中原中也独特の儂い雰囲気を感じることができました。そういった雰囲気を感じるのには彼が短命であったことを知ったうえで詩を読んだからなのかもしれませんが、儂さの中に人間の暗い部分や明るい部分が見え隠れしているなと思いました。(E)

⑩一連目の夜の中で陽が射すことや陽がさらさらと射すという不思議な感じに心が洗われるように感じた。小石ばかりで生物のいない河原に一匹の蝶が

飛んできたり、今まで流れていなかった川の水がさらさらと流れ出したりと「メルヘン」という感じが感じられてこの不思議な空間にいつまでも居たいなあと思った。(F)

⑧⑨⑩は「一つのメルヘン」に関する感想だが、皆「さらさら」に注目している。中也記念館の公開YouTubeでも「一つのメルヘン」の解説が「さらさら」を中心に行われており、「一つのメルヘン」の核と言える表現である。特に陽の光を「さらさら」というオノマトペで示す独自性が印象に残っているようであるが、これは学生たちに「異化」が行われていると言える。言うまでもなく、「異化」とは「普段見慣れた場所からずらして置き直すようにして、「見慣れないものにする」、「いきいきとした不思議に満ちたものにする」効果」である。⑧⑨⑩では陽の光が「さらさら」という言葉で形容されることで不思議な感覚がもたらされるとともに、陽の光に対しての自らのイメージと向き合い、新しい表現である「さらさら」を肯定的に受け入れている(「違和感を全く感じない」「面白い」「心が洗われる」「不思議な空間にいつまでも居たい」)。このような「異化」をもたらす詩として、若い感性を育てる良い教材であると実感した。

⑪「月夜の濱邊」はどこかで耳にしたことがあり、リズムの心地よさが記憶に残っていました。海に落ちていくものという具象などを連想しますが、海とは関係のない「ボタン」というのが面白いなと思いました。誰がいつ落とされたものだろうか、中也はなぜそのボタンに惹きつけられたのだろうか、と想像が膨らみました。「月夜」という状況がより神秘さを増して、たった一つの小さなボタンが大きな何かを秘めているように感じました。(I)

⑫では「一つのメルヘン」と同様に、一見関係がなさそうな海とボタンが結びつくことによる「異化」が行われ、その後の想像が膨らんだようである。また、「たった一つの小さなボタンが大きな何かを秘めている」という感想には、「大きな何か」を各人が想像する余地があり、想像力を広げる教材としての可能性を感じた。

⑫「汚れつちまった悲しみに……」も同様にリズムカルな詩である。何度も繰り返し現れる「汚れつちまった悲しみに」というフレーズが、詩全体のテ

ンポを整えているのだろう。しかし、相も変わらず意味は捉え難い。

この詩の意味は、「汚れつちまった悲しみに」にあるだろう。汚れつちまった悲しみとは何を表しているのだろうか。1連ごとに解釈していこうと思う。また、「汚れつちまった悲しみ」は便宜上Aとさせていただく。

1連…ここでは、Aに対して小雪が降りかかったり、風が吹き過ぎたりしている。これらはいずれも、Aが自然に対して受け身であることや、自然よりも弱い存在であることを表している。

2連…狐の革衣とは小手も希少価値の高い、高価なものである。Aはそれに例えられるほど大切なものであるが、1連の小雪によってちぢこまるような弱い存在である。また、皮衣ではなく革衣であることから、毛のない欠陥品であることがうかがえる。

3連…ここは非常に悲哀に満ちた箇所だ。Aは何かを望んだり願ったりすることもなく、倦怠(倦怠+懈怠の意)、つまり飽きてしまったり抑々の行為を行わなかったりしているうちに、死を夢見てしまう。死を望んだり願ったりするのはなく、あくまで届かない存在として「夢見ている」のである。4連…ここでの主語はAだろう。そしてAはAに対して怖気づき、それに対処もできずに一日を終えてしまう。1連の時同様、何もすることが出来ない存在なのだ。

以上の解釈から私が導き出した答えは、「Aとは読者自身」である。

——自然とは意識をせずとも我々の周りにある物である。つまり1連でいうところの「小雪」や「風」などの自然とは、社会の事ではないだろうか。我々には社会からの圧力(小雪)が掛けられている。そんな自分に対し世間は冷たい態度(風)で接してくる。確かに自分とは大事なものである。しかし自分自身だからこそ、隣の芝が青く見えて、自分自身が欠陥品のように思えてくる。そんな時ほど、世間に対し申し訳ないような気がして、身を縮こまらせずにはいられない。結果、「どうせ自分なんて」と卑下し、何も望んだり願ったりすることもなく、色々諦めてしまう。そのうち倦怠で死んでみようかなどと考えるが、自身に手をかけることもできず、全てを投げ出し、ただ死を思うことで終わってしまう。今度はそんな自分が恐ろしくなつて、どうにかしようと思えど、なすすべもなく、結局何もせずに日々を無為に過ごしてしまう。(K)

⑫は最も長文の分析を行ったレポートで、「汚れつちまった悲しみとは何を

表しているのだろうか」と問題提起をし、連ごとに分析を行っている。ただの感想ではなく、自ら問題提起をした上で、分析を行った意欲の高さが際立つ。

Kさんは最後に「汚れつちまった悲しみ」を読者自身と捉えており、面白い解釈と感じたが、少し飛躍があるように思えた。本レポートは提出時にシステム上でコメントを返しているが、「汚れつちまった悲しみ」——中也——読者自身というワンクッション置くと良いと指導した。中也を挟むことで「汚れつちまった」という感覚がより生き、そしてそうした中也の心情に同感する読者という広がりを持つことができると考えたからである。このように、コメントでは学生の感性を活かした上で、その感性を伸ばすための補助や別の視点を加えることを心がけている。

⑬「骨」も印象的でした。これは死生観を表したようなイメージで、普段思考を深めることのない「死」というのを中也の視点で見つめているように感じました。普段考えることのないからこそ、この詩を教科書に載せて、みんなが学習するのは意味があるように思えたので、印象に残っています。(A)

⑬は非凡な感想と思われた。「死」の感覚を感じただけでなく(「普段思考を深めることのない死」というのを中也の視点で見つめている)、普段考えることがない死生観を感じさせるからこそ、学習者の重要な学びになるという教育学部生らしいとても良い観点であると感じた。

・第二部で展示された詩について(「言葉なき歌」「早春散歩」「子守唄よ」)

⑭「言葉なき歌」です。遠いところにある「あれ」と、ここで待たなくてはならない「おれ」というのは、とても抽象的な対比ですが、情景が自然と浮かぶように儂い印象を受けました。この歌を書いていた時、何か遠くにあるものを想い、そのものに近づくことが出来ないのを憂っていたのかなという様子を感じました。また、タイトルが「言葉なき歌」なのも面白いと思いました。確かに言葉で記述されている詩なのに、「言葉なき歌」というタイトルにしたのは、詩自体じゃなくて別の言葉に表せないものを指しているとも解釈出来て、多くのことを連想させるような詩だと感じました。(A)

⑭は言葉に関する鋭い感性が散見される。「言葉なき歌」というタイトルに着目し、「言葉で記述されている詩なのに、『言葉なき歌』というタイトルにしたのは、詩自体じゃなくて別の言葉に表せないものを指しているとも解釈出来る、多くのことを連想させる」と述べているが、明哲な考察である。稿者は村上春樹を主に研究しているため、言葉と感情の乖離の感覚はよく分かるが、中也がこのような感覚を持っていたことに気づかされた。

⑮1つ目は『早春散歩』である。早春散歩と聞くとウキウキした感じを感じたが、1行目からそうでないなあと感じた。「空は晴れてても、建物には陰があるよ、」から始まり何か悩み事があるかのように感じる。晴れと陰の対比によってより陰の部分が強調されているように感じた。「私はもう、まるで過去がなかつたかのやうに」で忘れられない過去をなかつたように過ごしたいという気持ちが感じられる。あえて晴れの日を散歩することで悲しみを紛らわせようとしているように感じた。そして最後は「僕は思ふ、思ふことにも慣れきつて僕は思ふ・・・」と諦めたような感じで終わっている。春先のもどかしい気持ちを感じてとても心にグツときた。(F)

⑯印象に残った詩は「子守唄よ」です。母親が子供に送る子守唄は温かいイメージが頭にありましたが、どこに行くのだろう、途中で消えてしまいそうと言われると儂いものな気がしてしまいました。ほかの詩もですが、考え方が私とは全然違う方向でした。誰のために歌っているかと聞かれると子どものためだと思いますが、暗い海のような寂しい当時の世の中に聞き届けられるような感性の人はいないだろうと中原中也は考えているのかと思いました。解釈が難しい詩ばかりで苦戦していましたが、感性が独特だと思いました。(H)

⑰⑱とも「早春散歩」「子守唄」という優しいイメージの題と中身のギャップが印象に残ったようである。⑰では陰のイメージ（「陰の部分が強調されている」）を感じ、「あえて晴れの日を散歩することで悲しみを紛らわせようとしているように感じた」としている。⑱でも「母親が子供に送る子守唄は温かいイメージが頭にありましたが、どこに行くのだろう、途中で消えてしまいそうと言われると儂いものな気がしてしまいました」とあり、自らの感覚と中也の詩の感性との違いを感じている。これらの「違和感」も大切な感覚である。

「一つのメルヘン」のように違う感覚に驚きながらも肯定的に受け入れることが理想であるが、自分の感覚と相容れない場合も多々ある。しかし、それは他者を認識することに繋がり、ひるがえって自己を見つめ直すことにもなるからである。

・第三部で展示された詩について（「酒場にて」「詩人は辛い」「頭をポーズにしてらやう」）

⑰詩人は辛い

「論語読みの論語知らず」という言葉を思い出した。真剣に物事に取り組むわけではなく浅い知識のままうわべだけ取り繕うじんぶつは多様な趣味関心事のある現代でも見かけることができる。正直な話自身の本質を突かれたような気がしてグサリト来た。

要するにかっこつけた自分のメッキがポロポロと剥がれ落ちてくるさまを滑稽に思い詩に表現しているのだと個人的に感じた。十代からの人気をこの詩が集めた原因にはひょっとしたら自分を着飾る、あるいは他人に同調するために歌を聴く人と同じことをして、そんな欺瞞をなんとなしに察したがためなのかもしれない。(D)

⑱「頭を、ポーズにしてやらう」は、今まで真面目に生きてきたが故に心に余裕がなく、溜まっていった日ごろの鬱憤が爆発したような感じがした。そして、高校時代の恩師に「あまり真面目過ぎるのも良くない、時には気楽にやってみたら？」と言われたことを思い出した。自分も、物事を真面目にとらえずに何でもできない自分に落ち込んだり、いっぱいいっぱいになったりすることがある。時には、言い方は悪いが「手を抜く」ということも大切なかもしれない。真面目過ぎてても人生楽しくないだろうか？というようなメッセージが最後の「真面目臭ってあられるかい」という表現に込められている気がする。

『詩人は辛い』では、中也の世間への不満と詩人としてのプライドが伝わってきた。歌詠みが大衆に迎合してしまったりいけない、自分の素直な気持ちを歌にするべきと訴えているような感じがした。この詩からあとに中也は作品を残したのかどうか気になった。(G)

①「頭を、ポーズにしてやろう」では「してやろう」という語尾の通り自由さや疾走感、大胆さというものを感じましたが、「詩人は辛い」では重たく塞ぎ込んだ感情や絶望を感じました。同じ詩人が作ったものだと思えないほど対極的だと感じましたが、中也は「詩人は辛い」で表現したような感情をどこかでずっと抱えており、「頭を、ポーズにしてやろう」にはそのような思いから解放されたいという願望が込められているのかもしれないと思いました。このほかの詩も繰り返し読み返したいと思うものや、どういった意味だろうかと考えたいようなものばかりでした。ほかの作品や中也の人生について、もっと調べてみたいと思いました。(I)

②今回の中原中也記念館に行ってみて、私は「酒場にて」が好きだと感じました。好きの理由として、中原中也の信念や人間性が感じられるという点があります。私は、あまり深みを持った歌や言葉遣いの真意を理解したり、自分なりに解釈することが苦手で、ある程度有名だけどこか面白さを感じる詩などよりも、人が切実な願いや信念が読んでいる側にもストレートに伝わる詩が好きで、だから今回の「酒場にて」の全体的に感じる悲しい時には、悲しいだけ悲しんでいられるほうが輝いているというマイノリティーだったとしてもそう思い貫こうとする信念が見えるところが好きです。また同じ理由で、「詩人は辛い」も好きです。この詩も誰も詩なんて聞いてない詩を聞いている自分に酔っているだけという思いが見えるところが好きです。ここから私は詩自体よりも詩を通じた作者の、ここでは中原中也の人間を見るのが好きといった方が良いのかもしれないと思いました。ただこれからちゃんと深みのある詩を理解できるようにもならないかと思いました。(J)

第三部の詩を選んだ学生は男性が多かった。第三部はどちらかと言えば反骨精神のある詩であり、第一部のような儂さ、メルヘンのようなものとは違う面に惹かれたようである。散見されるのは「同じ気持ち」という共感である(正直な話自身の本質を突かれたような気がして)、「高校時代の恩師に「あまり真面目過ぎるのも良くない、時には気楽にやってみたら?」と言われたことを思い出した」。展示では「詩人は辛い」が十代男性の人気を集めたとの解説があったが、本ワークショップでも同様の結果となっており、これらの詩群が十代の男性を引きつける要素があるのだと感じた。ジェンダーの観点も今後の

分析の一つの方向となるだろう。

また、第三部の詩は中也を意識していることも共通している(「中也の世間への不満と詩人としてのプライドが伝わってきた」、「中也は「詩人は辛い」で表現したような感情をどこかでずっと抱えており」、「詩自体よりも詩を通じた作者の、ここでは中原中也の人間を見るのが好き」)第三部の詩群から、「中原中也」という詩人の思いを感じ取ることができたようである。

* *

「教科書」における印象に残る詩の傾向として、「共感」、「発見」、「違和感」がある。「共感」は第三部の詩群に多く見られ、「発見」は第一部の「サーカス」「一つのメルヘン」等における「異化」とその表現の受容や「言葉なき歌」「骨」における言葉と感情の乖離、死生観の繋がり、「違和感」は「早春散歩」「子守唄よ」で見られた自分と中也の感覚の違い、と言える。これらはどれも重要な感性であると考えられ、授業として一つの成果が得られたと判断できる。

3 その他

②私は中原中也と聞くと小学校の時に授業で学んだことのあるサーカスがなぜか頭の中に残っていた。「ゆあーんゆあーんゆあーん」という特徴的なリフレインで一つ一つどのような気持ちか考えた記憶がある。また、高校では合唱部が中原中也の詩の歌を歌うなど詩や中原中也について触れることも多かった。(F)

Fさんは山口県出身の学生であるため、小学校から高校まで中也に触れることが多かったようであるが、合唱部が中也の詩を歌うエピソードは新たな発見があった。つまり、詩という素材をメロディに載せて歌うという方法で詩に親しむ有効性である。今後の授業の参考にしたいと思わされた。

おわりに 成果と課題

今回のワークショップにおいて新しく導入した事前解説動画の予習は、コロナ禍が収束した後でも有効と考えられる。今回池田さんには展示の見どころと苦勞した点について解説していただいたが、館内解説では主としてそれぞれの作品についての解説が多かったため、展示全体のねらいや苦勞した点などに

いては話したことがなく、とても良かったとお言葉を頂いた。学生にとっても、展示全体のねらいを予習で知ること、第一部、第二部、第三部の流れが頭に入り、漫然と展示を見ることがなかったようである。事前解説動画の録画は、来年度以降も継続して行いたいと池田さんに提案し、了承を得ている。三密を避けるための二グループ入れ替え制であったが、これも今後も有効な方法であると感じた。一階の展示室は十二名が一つの場で聞くにはスペースが狭く感じられたことと、一階は教員の目があるが、二階は完全な自由閲覧で自分の興味があるところを見るところというスタイルで、大学生に相応しく感じたからである。二階は企画展示だけではなく、クイズをするところや、映像が見られるブースがあるので一階よりも選択肢が多く、二十五分という限られた時間の自主性に任せる活動は、ワークショップ型授業の定義、「自由感のある「活動」

1 http://www.yamaguchi-u.ac.jp/~8288/_8618.html

山口大学のガイドラインでは次のように定められている。(1) おおむね五〇人、(2) 講義室等の収容定員のおおむね五〇%、(3) 出席する学生間の距離を一〜二m程度確保し、対面とならない形とする。

実施にあたっての感染防止対策は以下である。(1) 講義室等は可能な限り窓を開放して室内の換気を行い、窓の開放ができない場合は、授業の中間(三〇分から四十五分を目安)に小休憩を設けて換気すること。(2) 授業担当教員及び受講する学生は、マスクを着用し、授業開始前及び終了後は手指消毒を行うこと。(3) 授業担当教員は、各自の健康状態に注意を払うために「健康観察表」を記録するよう学生に指導すること。

「健康観察表」を記録するよう学生に指導すること。
対面授業再開にあたっては、受講者全員にウエブ(就学支援システム)上でアンケートを行い、受講者の意志を確認している(対面授業再開における申請の条件)。また、対面授業再開に不安にある人は、遠隔授業の形でも受講できる体制を取っている。

2 上条晴夫編著『ワークショップ型授業で国語が変わる 中学校』(図書文化社・二〇〇四、八頁)

を通して学ぶことで、関心・意欲・態度を基礎とした主体的な学びの力を育てる」にふさわしい活動であると考えられる。

また、教員が解説するのを聞く受け身でなく、自分で選ばせることも手応えを感じた。今回はほとんど何も解説を行わないままにレポートを書かせたが、自分でメモを取らないと書く内容がないので、多くの学生のメモを取る姿に真剣さが見えた。そのような自主性に任せた後の課題レポートは、意欲の高いものとなり、中也の詩に興味を持つ状態になったと判断できる。この後、中也の詩のより深い解説を行うとより高い学習効果が生まれると予想できる。今後は「基礎セミナー」をスタート地点とし、興味を継続させるための活動が必要と考えている。

3 注2に同じ。九頁

4 <https://www.youtube.com/watch?v=IX00DrWmpc&feature=youtu.be>

5 刈谷剛彦氏は「批判的読書」を次のように述べている。「著者が書いていることを、専門家や有名な評論家、あるいは大学教授が書いているのだからと思つて、そのまま鵜呑みにするのではない、そういう態度をもつて本に接する。そして、できるかぎり、書き手の論理の勧めかたを、他の可能性も含めて検討していく。つまり、対等な立場に立つて、本の著者の考える筋道を体験すること、自分の思考力を強化しようというのが、批判的読書の方法です」。

(『知的複眼思考法』講談社α文庫・二〇〇二、八九〜九〇頁)

6 島村輝「異化」(『読むための理論』世織書房・一九九一、一六五頁)
*本ワークショップは中原中也記念館の全面的な協力の下で行うことができたものである。中原豊館長・池田誠学芸員を始めとし、記念館の全てのみならずにご協力を賜った。事前打合せ・当日の活動だけでなく、本稿がガイドラインにふさわしいか等についても、記念館全ての皆様にご確認頂いた。記して深く感謝の意を述べたい。